

アトモスフィア

黙ってはいられないこと

勝木元也*

昨今の大学の教授たちの忙しさは常軌を逸している。「評価」と「競争的資金」への対応に追われる毎日のようだ。本来の職務である教育と研究に没頭できる状況でなくなっている。それどころか、教育と研究とを中断して、非専門家への説明のために莫大な時間を浪費しているのだ。

大学での研究は、「学術」と称され、個人の自由な発想に基づくもので、相互に厳しく批判を重ねながら、創造的な知識を生むことに価値が置かれてきた。創造性は、当然のことながら多様な人材から生み出され、この多様な知の広がりこそが学術の振興であるはずだ。あらかじめ計画できない未知への挑戦こそ創造の源泉である以上、創造性に最も価値を置く大学を、誰が、如何に評価するのか。目標を立てさせ、その達成度を評価することに学術はなじむのか。

しかし大学の評価は始まっている。評価の結果次第によっては、次期中期計画に対する資源配分が決まると言われれば、評価委員会が提示する質問事項に応えた報告書を書かざるを得ないのが現状である。データを揃え、自己点検し、点取り虫的回答を作るのは、学術を志す人間にとって、もっともむなしい作業ではないか。

一方、我が国の財政的危機を背景になされる評価に対しては、行政に任せない大学の存立をかけた自己点検と相互批判とが必要なことも確かである。

忙しさには、もう一つ「競争的資金」への応募がある。ここで述べたいのは、学部や研究科、あるいは国際協力での拠点形成など、機関を対象に行われる「競争的資金」のことである。これまで経常経費として支援されていたものが、減額される一方、競争的にして再配分しようとしているように見える。評価への対応と同様、目標を立て、達成に至る詳細な計画を提出するから、ここにも、優秀な人材が、本来の職務を離れて使われることになる。制度は、多様な選択を前提に作られているはずだが、多くの場合、採択されやすい計画に、少し飾りを付けたものが多く、徐々にステレオタイプ化して行くのは避けられないであろう。

その任に当たった教授は、1年間のほとんどを、調整とポンチ絵作りと文章作りとに時間を取られ、自らの教育と研究の実績や成長が、評価の対象たり得ないという、もったいない浪費が行われている例も少なくない。

そろそろ、各人が、どのくらい自ら浪費と判断できる時間をやむを得ず使っているかを調べるべきときが来たのではないか。そして実態を冷静に認識し、あまりに無意味な活動に対して、声を上げるべき時が来たのではないだろうか。

さて、ついでだが、科学研究費補助金が、いつの間にか「競争的資金」の代表格とされ、規制緩和のかけ声の下、企業を含む大学以外の機関にも解放された結果、学術の振興に資する目的で設定された補助金に、プロジェクト研究を主体とする機関からも多くの採択がなされてきた。議論はあろうが、学術に対する支援としての科学研究費は、やはり創造性に基礎を置いた審査が重要で、目的指向的にすでに支援されているプロジェクト研究の一部を支援するのは、本来の趣旨と異なるばかりか、学術に対する侵略になりかねない。科学研究費補助金は、「競争的資金」という語感から来る決められたルールの下で速さや力を競うものではなく、本来の学術研究の多様な営みを適切に補助するものであるから、それを一般的な土俵に持ち出して、審査をするのは制度の貧困につながりかねないとする。

唐突で恐縮だが、先日、阿川弘之氏の随筆を引用した、さるところでの挨拶に反響があったので、最後に創造的活動に心すべき3原則について述べたい。

「泣きたいほどに美しい」とブルーノ・タウトをして評させた桂離宮についてである。八條宮智仁親王が秀吉の財政的援助を背景に、京の名匠たち（誰かは不明）に誓約させた3つの事項がある。

- 一、労賃を吝む勿れ（おしむなかれ）
- 二、成功を急ぐ勿れ
- 三、完成まで来たり観ること勿れ

現代風に言えば、創造の源泉は人にあるのだから、決して人件費をケチってはならない。また本来の大きな目的を忘れ、近くの易しい作られた目標達成で、お茶を濁すな。そして自らが納得する完成までは、中間評価などよけいな雑音を入れるのは有害無益である。

紙数が尽きてきた。創造性とそれを生み出す人を生かす学問の場である大学は、かくの如き原則を貫くべきではないだろうか。

*基礎生物学研究所名誉教授